

大和の古道

―筋違道とコグリ石―

京都教育大学 名誉教授

和田 萃

一 大和の古道

奈良盆地には、古代に敷設された道が現在に至るまで利用されている。山辺の道、紀路、筋違道、横大路、上・中・下ツ道であり、全国的にみてもまことに珍しく、貴重な文化遺産と言つてよい。また大阪府や滋賀県にも、古代に敷設された道が少し残っている。山辺の道は、四世紀初頭に即位した崇神天皇（ミマキイリヒコ）の時代に敷設されたと思ふ。三輪山々麓から、北方の平城山の麓に至る道であつた。

紀路は山辺の道に次いで古く、五世紀初頭に敷設され、三輪山々麓の海石榴市から、和歌山県和歌山市の和歌の浦近くまで達する道であつた。今も紀路は近鉄吉野線の飛鳥

駅付近から、和歌山市内まで残っている。

『日本書紀』の欽明七年（五四六）七月条に、紀路に関わる注目すべき記述がみえる。

倭国（大和国）の今来郡（後の高市郡）からの言上によれば、欽明五年（五四四）の春に、ひのくま 桧隈邑（奈良県高市郡明日香村桧前）に住む、やましのあやち 当时、倭漢氏の首長だつた川原民直宮が、自宅の楼上から西方を走る紀路を眺めていると、紀伊の国の漁夫が雌馬に贅を積んで、しきしまのかさしのみや 明天皇の磯城嶋金刺宮に向かうのを見た。雌馬に子馬が付き添つており、宮は子馬がいずれ駿馬となると見込んで買い取つた。果たして子馬は駿馬となり、欽明七年七月には、大内の丘の谷を十八丈も飛び越えたという。なお欽明天皇の磯城嶋金刺宮は、桜井市慈恩寺小字「式嶋」を中心とした一帯に所在した。

勿論、伝承の域を出るものではないが、大内の丘は、後に天武・持統合葬陵とされた地。今も往時と同じく大内の丘を挟んで、西方の鬼の俎、鬼の厠から、聖徳中学校の前を通じて東へ向かう道と、大内の丘の南側から東側に廻り込んで北に進む道が交差しており、今も往時を偲ばせている。

筋違道は、斑鳩と飛鳥を結ぶ斜めの道であつた。推古九年（六〇一）二月～十三年（六〇五）十月に、厩戸皇子（聖徳太子）によって斑鳩宮の造営が行われ、同時に斑鳩と飛鳥の小墾田宮を結ぶ筋違道が敷設された。今も筋違道は、生駒郡斑鳩町大字高安付近から、しきぐんたわらもとちようはつ 磯城郡田原本町保津までの間によく残っている。

横大路は、推古二十一年（六一三）に敷設された真東西に走る道で、寺川に架けられた桜井市谷の小西橋から、西方の葛城市長尾の長尾神社に至る道であり、長尾神社の東北隅で竹内街道に接続する。『日本書紀』の推古二十一年十一月条には、「難波より京に至る大道を置く」と記す。旧堺港に近い堺市の大小路から、大津道・丹比道をへて、奈良県葛城市長尾の長尾神社に至る道筋については、『明日香風』一二九号の小論「竹内街道

と横大路」を参照されたい。

上ツ道・中ツ道・下ツ道は、斉明朝に敷設された南北道であり、今もよく残っている。

天武元年（六七二）六月に勃発した壬申の乱では、大海人皇子（後の天武天皇）軍と、大友皇子（天智天皇太子）の率いる近江朝廷軍が近江路で激戦を繰り広げ、大海人皇子軍が勝利した。『日本書紀』巻第二十八には、大和の横大路や上・中・下ツ道でも、両軍による激戦が繰り広げられていたことが詳細に述べられており、注目される。

二 筋違道

『日本書紀』の推古十三年（六〇五）十月条に、「皇太子、斑鳩宮に居す」とみえ、四年八カ月に及んで斑鳩宮が完成し、斑鳩宮と飛鳥の小墾田宮を結ぶ道（筋違道）の敷設も終了した。現状の筋違道は、生駒郡斑鳩町大字高安付近から、田原本町保津に至るまで残っている。以下、その行程を簡略に示す。

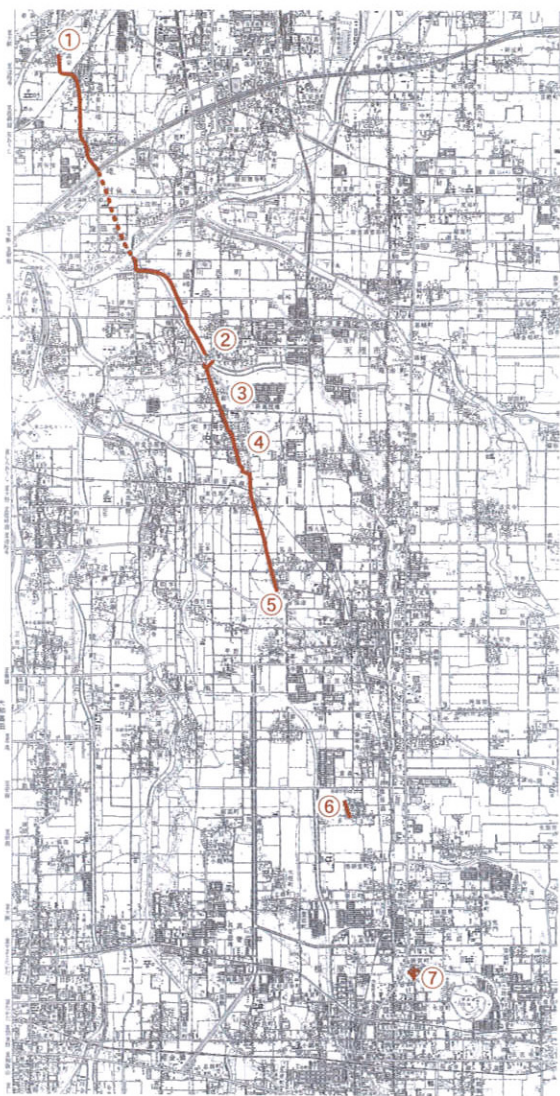
生駒郡斑鳩町大字高安付近から、安堵町の東安堵をへて、南南西に進む。西名阪自動車

道の下を潜り、同町の、かしのき台、窪田をへ、馬場尻橋を渡り、磯城郡川西町の寺川沿いを南南東方向に進めば、川西町結崎の糸井神社に至る。同社から宮前橋を渡り、三宅町屏風、同町伴堂、田原本町黒田をへて、同町の保津に至る。

地名や関連する神社を列挙すれば、以下の如くである。生駒郡斑鳩町高安から、同郡の安堵町東安堵—窪田—磯城郡川西町吐田—結崎の糸井神社—磯城郡三宅町屏風の杵築神社—伴堂の白山神社—磯城郡田原本町黒田—宮古—保津に至る。

とりわけ注目されるのは、三宅町屏風の杵築神社と同町伴堂の白山神社であろう。杵築神社の境内には、天保四年（一八三三）の牛頭天王宮の常夜燈、天保七年（一八三六）の牛頭天王社の常夜燈があり、拝殿には、慶応四年（一八六八）九月の「おかげ踊り」の絵馬がある。また伴堂の白山神社境内には、聖徳太子の腰掛石があつて注目される。

現状の筋違道は、斑鳩町大字高安付近から田原本町保津までであるが、一九九四年度平成六年度に、田原本町教育委員会により実施された保津・宮古遺跡の第十四次調査で、現在の筋違道南端から約五〇メートルほど南に離れ



- ①斑鳩町高安 ②川西町の糸井神社 ③三宅町屏風の杵築神社 ④三宅町伴堂の白山神社
- ⑤田原本町保津 ⑥田原本町多の道路痕跡 ⑦橿原市新賀町の市杵嶋神社

た地点で、さらに南東方向に延びる道路遺構が検出された。

地図上でその延長をたどると、田原本町多に所在する多集落西側の道路にとり付く。わずか一九〇メートルほど残るにすぎないが、筋違道の一部と認めうる。また西方二五〇メートルの所に多神社が鎮座し、広大な社叢が広がることも注目されよう。

多神社は、『古事記』を筆録した太朝臣安萬侶ゆかりの地であり、現、宮司の多忠記氏は、「安萬侶さん」から五十一代目にあたる。多宮司と私は、田原本中学校の同級生で、三年生の折には同じクラスであったから、今も多神社や「安萬侶さん」のことを、いろいろ教わっている。

筋違道については、今も記憶に鮮明な思い出がある。田原本小学校（奈良県磯城郡田原本町に所在）三年生の折のこと、遠縁の女性が我が家にみえ、母と話合っておられるのを側で聞いていると、屏風（磯城郡三宅町屏風）の人であった。しかし幼い私は、屏風という地名が何とも不思議に思われ、尋ねてみると以下のように教えていただいた。

昔、聖徳太子が斑鳩から飛鳥へ通われる折、ほぼ中間にあたる屏風の地で休息された。し

かし尊いお姿を、村人らが目の当たりに見るのは甚だ恐れ多いことなので、太子の回りに屏風を立て廻すようになったところから、「屏風」という地名が生まれたとのこと。まことに素朴で牧歌的な伝承であり、それが現在に至るまで語り継がれているのは、大和ならではのことだ、と思われる。

田原本中学校の二年生の春休みに、友人二人と共に自転車に乗って筋違道を走り、法隆寺へ行ったことがある。偶然にも聖霊会の折で、金堂内は色とりどりの造花で溢れんばかりに飾られていた。今も記憶に鮮明である。しかし自転車で法隆寺へ行った三人は、当時、「筋違道」という呼称も知らずにいたのである。私が「筋違道」と認識して歩くようになったのは、大学院へ進学した頃からであった。

三 橿原市新賀町の市杵嶋神社

現存する筋違道と、田原本町多に残る道路痕跡のみでは、飛鳥の小墾田宮に至る道筋を復元することは難しい。いくつかの基点を求める必要があるだろう。しかし平城遷都に伴って、奈良盆地に条里制地割りが施行されているので、手掛かりはほとんど無いに等しい。わずかな手掛りは、橿原市新賀町に所在

する市杵嶋神社の地である。

随分と前のことであるが、奈良県立橿原考古学研究所におられた河上邦彦氏が東明神古墳（奈良県高市郡高取町佐田に所在）の発掘調査をされていた頃、一緒に市杵嶋神社を訪ねたことがある。河上氏はすでに何度も訪ねられていたが、私は初めての探訪であった。

市杵嶋神社は、橿原市新賀町の集落中央北寄りの所に、南面して鎮座する。近鉄大和八木駅から、東北東へ約八五〇メートルほどの所であり、集落の南側から西側にかけて、米川が大きく曲流している。また市杵嶋神社の北側には、奈良県指定文化財の森村家住宅が所在する。

市杵嶋神社の創立時期やその由緒は明らかではない。正面の石鳥居に、「奉寄進 鳥居 森村正延 享保八癸卯歳（一七二三）八月二十二日」とみえるのが最も古い（『橿原市史本編』下巻）。境内地は狭く西側の瑞垣に接して、「コグリ石」と称する石造物が据えられている。新賀村の成立は十八世紀初頭頃かと思われるので、コグリ石とは全く無関係であり、古代からコグリ石は所在していたとみてよい。

河上氏によれば、兵庫県高砂市に所在するほうでんやま たうやま宝殿山の竜山石（凝灰岩質砂岩）を、海路・水路・陸路を利用して、奈良県橿原市新賀町の市杵嶋神社の地まで運び、他に例を見ない特異なコグリ石を造り、あたかも太い柱を立てる構造だと指摘されている。コグリ石の構造も然る事ながら、竜山石で造られた古代の石造物が、橿原市新賀町の市杵嶋神社に所在することに驚いた。

その後、私は機会あるごとに市杵嶋神社を訪ねてコグリ石を観察し、あれこれ考えを進め、今日に至っている。市杵嶋神社に所在するコグリ石を、どのように考えればよいのか、まだ十分に検討出来ていないが、目下、思案するところを簡略に述べる。

「コグリ石」の規模や状況については、以下の通り。本稿を執筆するに際し、現場を訪ねて簡略に計測したものであり、参考までに記す。

コグリ石は台石の上に置かれ、東面している。台石も竜山石おほと思しい。台石の正面（東面）から背面（西面）までの長さは一〇三センチメートルで、側面は八九センチメートル。台石の上にコグリ石を据えている。コグリ石の正面は一二一〇センチメートル、側面は一一一〇センチメートル、高さは約一〇四センチメートル。

コグリ石の東面上部は後世に大きく破壊されているので、幸いにも内部の状況を観察することが出来る。下部の底面は、奥に真っ直ぐ四角形に突き抜けており、さらに上部中央から径三〇センチの穴が底面にまで穿たれている。文章ではコグリ石を上手く説明出来ないで、関心を持たれる方は機会があれば市杵嶋神社を訪ねて、不思議なコグリ石を検討されたい。

四 筋違道と「コグリ石」

以下、古代における橿原市新賀町とその周辺地域の状況、推古九年（六〇一）五月に推古天皇が耳梨行宮みみじのあきぐさに行幸した背景などを手掛かりとして、コグリ石の用途について私見を述べる。ただし問題となるのは、「コグリ石」が造られた年代であろう。

コグリ石は、兵庫県高砂市の宝殿山（石の宝殿）から、橿原市新賀町の市杵嶋神社へ運ばれたものであるが、その時期は未詳。高砂市の石の宝殿は、橿原市に所在する益田岩船ますだいわふねと同形の巨石で、七世紀末のものとされる。しかしコグリ石は遙かに小さく、以下にふれるように推古朝に遡るものでは、と愚考している。古代史研究者である私には、年代につ

いて言及する資格がない。私の個人的な臆説にすぎないが、以下、その理由を述べる。

まず新賀町を中心とした一帯の地形や、耳梨行宮に関わって検討を加える。先にふれた如く、『日本書紀』の推古九年（六〇一）二月条に、皇太子（厩戸皇子・聖徳太子）が斑鳩に初めて宮室を起した記事がみえている。また同年五月条には、推古天皇が耳梨行宮に居た折、大雨が降って河の水が溢れ、宮の庭も水浸しになったと記す。耳梨行宮の所在地は未詳。しかし河の水が溢れたと記すから、耳成山に沿って流れる米川よねかわ沿いの地を指すともよい。

耳成山は、香具山や畝傍山と共に、古来、大和三山と称されてきた。耳成山と畝傍山は、人類が誕生する遙か二百万年前に誕生した火山であるのに対し、香具山は、東方に聳える細川山の山裾が少し盛り上がった端山はやまにすぎ



市杵嶋神社のコグリ石

ない。しかし、そうした香具山が神聖視されたのであり、注目される。

古代の人々は、地上に所在する香具山の真上の天空に、神々が住む高天^{たかま}が原^{はら}世界があると観念していた。しかし地上の「香具山」と、天空にあるとされた「天の香具山」が次第に混同され、万葉の時代には、地上の香具山も「天の香具山」と称されるようになったのである。

推古天皇の耳梨行宮への行幸は、耳成山を神聖視して行われたものではない。行宮も耳成山には営まれていない。推古天皇が耳成行宮に滞在中、大雨が降り河の水が溢れて行宮の庭に満ちたとみえることから、耳成山を巡って流れる米川沿いに、行宮が所在したとみてよい。

米川は、桜井市大字橋本小字地藏ヶ谷に所在する青木廃寺（橋本廃寺とも）附近から流れ出し、古代には百済川と称されて「百済野」の一带を潤した。百済野の呼称は、百済や伽耶^{かや}から渡来した多くの人々が居住したことに基づく。山部宿禰^{うくみ}赤人の歌「百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯^{うぐす}鳴きにけむかも」〔万葉集〕巻八―一四三一も、この地で詠まれた可能性が大きい。

古代の百済川は、今では米川と称されて、耳成山の北東隅で曲流して西方へ流れ、少し下流の橿原市新賀町附近で、再び九〇度も曲流して北方へ流れる。こうした米川の流れは、奈良盆地では珍しい。奈良盆地を流れる諸河川は、平城遷都後には条里制地割に沿うものが多い。しかし桜井市域や橿原市域を流れる戒下川^{かいげがわ}・米川^{よしかわ}（古代には共に百済川）の流域は、条里制施行以前の地割りをよく留めており、注目される。

享保二十一年（一七三六）に成った『大和志』では、耳梨行宮の所在地を木原村の地（橿原市木原町）に宛てている。橿原市木原町は、耳成山とその周辺地域を占めており、すぐ西方域は、市杵嶋神社が鎮座する橿原市新賀町の地であることが注目されよう。

市杵嶋神社の地には、先にもふれたように推古朝に造られたと思^{おも}いコグリ石が所在する。コグリ石は、兵庫県高砂市の宝殿山にある竜山石を切り出して、遙々、奈良県橿原市の市杵嶋神社の地まで運ばれた。コグリ石に手を加え、直径三〇センチの穴を垂直に穿ち、一〇センチ及ぶかと想像される柱を立てる構造となっている。

『日本書紀』によれば、推古九年（六〇一）

の夏五月、推古天皇が耳梨行宮に滞在中に大雨が降り、河の水が溢れて宮庭に満ちた。簡略な記述であるが、なぜ推古天皇は豊浦宮から程遠からぬ耳梨行宮に赴いたのだろうか。その背後には注目すべき国家儀礼がとり行われた可能性があると思われる。

憶測の域を出るものではないが、推古天皇の耳梨行宮への行幸の目的は、厩戸皇子（聖徳太子）による斑鳩宮の造営開始と、斑鳩宮と豊浦宮を結ぶ筋違道の敷設が開始されたことを寿ぐ儀式に臨むことにあったのでは、と考えている。想定される耳梨行宮の所在地と、新賀町の市杵嶋神社の地とはごく近接していた可能性が大きい。

【追記】

河上邦彦氏と同道して、新賀町の市杵嶋神社のコグリ石を見学してから、三十年を経た。今日まで、私は機会あるごとに市杵嶋神社を訪れ、コグリ石について、あれこれ考えているが、解明するのは寔に難しい。本稿では、これまでに考え得たことを簡略に述べた。関心のある方は、是非とも市杵嶋神社のコグリ石を観察して、新しい知見を示していただきたく思う。